

現代神学 第2回
オンデマンド動画 第1回

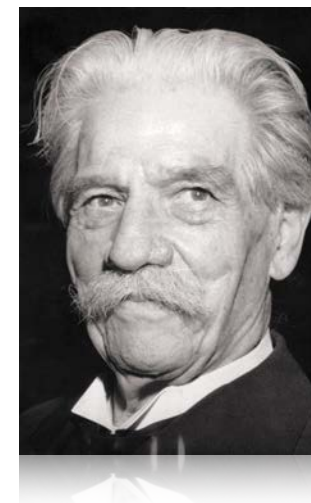
世界大戦のただ中から (1) — A. シュヴァイツァー —

小原 克博

1

Overview

1. シュヴァイツァーの生涯
2. 神学思想
3. 生命（生）への畏敬
4. 影響史



2

1

シュヴァイツァーの生涯

- ・ 1875年 カイザースベルク（1921年までドイツ領）で牧師の長男として生まれる。
- ・ 1896年（21歳） 「わたしは、30歳までは、学問と芸術のために生きよう。それからは、直接、人類に奉仕する道を進もう」。
- ・ 哲学・神学・音楽に専念していく。聖ニコライ教会の副牧師、シュトラースブルク大学神学部の講師となり、また、パイプオルガン奏者としても著名になっていた。

3

4



5

- ・ 1905年 30歳から医学を学ぶ。『バツハ』を出版。
- ・ 1906年 『イエス伝研究史』を完成。1912年 大学と教会に辞表を提出。
- ・ 1913年 (38歳) ガボンのランバレネに向かう。
- ・ 1914年 第1次世界大戦はじまる。自宅に拘禁される。
- ・ 文化とは何かについて考え始める。現代文化の退廃と、文化再建の道。

6

- ・ 1915年 (40歳) オゴーウェ川をさかのぼる途中「生命への畏敬」の理念を考えつく。
- ・ 1917年 フランス本国の捕虜収容所にはいるために、ランバレネを去る。
- ・ 1918年 捕虜交換でドイツに戻る。
 - ・ 2万フランもの借金が残る。パリで豪勢に暮らしていたピカソの1ヶ月の生活費が千フランの時代であった。
- ・ 1919年 スウェーデンの大僧正から講演に招かれる。ヨーロッパの各地で講演や演奏をし、大成功を収める。

7

- ・ 1924年 再びランバレネへ向かう。
- ・ 1926年 内村鑑三、シュヴァイツァーに寄付金を送る。
- ・ 1928年 フランクフルト市よりゲーテ賞を受ける。
- ・ 1931年 『わが生活と思想より』出版。
- ・ 1953年 (79歳) ノーベル平和賞受賞。
 - ・ 「現代における平和の問題」を講演。
- ・ 1957年 オスロ放送局から原爆実験中止を訴える声明を放送。
- ・ 1965年 (90歳) 逝去。

8

2

神学思想

9

史的イエス研究

- ・ 著作
 - ・ 『メシア性の秘密と受難の秘義——イエス小伝』（1901年）
 - ・ 『ライマールスからブレーデまで。イエス伝研究史』（1906年）
 - ・ 『使徒パウロの神秘主義』（1930年）
- ・ 近代的なイエス像を批判
- ・ 19世紀末の宗教思想（特に文化プロテスタンティズム）によれば、イエスは地上において倫理的な神の国を建設しようとした「道徳的教師」であった。

10

徹底的終末論

- ・ 黙示終末的預言者としてのイエス
- ・ イエスは徹頭徹尾、後期ユダヤ教のメシア待望の中で生きていた。神の国は人の子と共に、超自然的に出現すると期待していた、と理解する。
- ・ イエス神秘主義
- ・ 時代的な制約を受けたイエスを直視しながらも、時代を超えて語りかけ、信仰を呼び起こし、倫理的実践へと駆り立てるイエスを見出そうとする。

11

3

生命（生）への畏敬

12

Ehrfurcht vor dem Leben

- ・「わたしは、生きようとする生命に取り囲まれた生きようとする生命であるという事実」
- ・オーゴウェ河をのぼる船の中で突如思いつく。
- ・「河馬の群の間を船が進んでいったとき、突如、今まで予感もしなければ求めたこともない『生命への畏敬』という言葉がひらめいたのであった。——鉄扉は開けた！ 密林の道は見えてきた！ ついにわたしは、世界・人生肯定と倫理とともに包含される理念に到達したのである！」（『我が生活と思想より』、以下も）

13

また、「生への畏敬」の倫理について人が特に奇異とするのは、この思想が、高い生命といやしい生命、価値ある生命と無価値の生命のあいだに何の差別もつけない、というにある。さあれ、この無差別にもやはり確乎たる理由がある。

生きとし生けるものの生命のあいだに価値の別を設けるのは、結局、われらの感ずるところに従って、ある生命が人間に近いか遠いか、というに帰着する。すなわち、全然主観的な標準にすぎぬ。他の生物の生命が、それ自身としてまた全世界の中に、いかなる意義をもつものか、——そもそもわれらのなにびとの知るところぞ？

この差別感の結果、世界には無価値の生命もあって、これを毀損したり滅ばしたりしても差支えない、という思想が生ずる。この無価値の生命といわれるものは、時に応じて、昆虫の種類であったり野蛮人であったりする。

14

私は少年時代から動物愛護運動に加わっていた。しばしば単なるセンチメンタリズムにすぎぬ、として軽蔑される動物への同情の念を、倫理的な感情として説くことができるのは、歡びに堪えない。「生への畏敬」の普遍的倫理は、この動物への同情を、思索する人間の回避するを得ざるもの、としてしめす。従来倫理は、人間対動物の問題に対しては、無理解であるか、または答えるところを知らなかった。従来倫理の主眼とするところは、人間対人間の関係のみにあった。たとえ動物への同情を正しいとは感じていても、これを倫理の中に包摂することができなかった。

動物虐待がその骨子となっているようないっさいの民衆の娯楽を、一般に認めなくなるような時代は、いつになったら到来するであろうか！

15

4

影響史

16

影響史

- ・ 20世紀神学における終末論の再発見
- ・ エコロジー思想・生命倫理への影響——生命中心主義
- ・ レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（1962年）はシュヴァイツァーに捧げられている。
- ・ 動物福祉（愛護）運動への影響

17

Albert Schweitzer Stiftung



ÜBER UNS AKTUELL KAMPAGNEN THEMEN DIE TIERE PRESSE HELFEN

Sie sind hier: [Start](#) | [Aktuell](#) | Jubiläum: Albert Schweitzers Ehrfurcht vor dem Leben

Suche

Jubiläum: Albert Schweitzers Ehrfurcht vor dem Leben

Veröffentlicht am 14. Januar 2015, zuletzt aktualisiert am 15. Januar 2015



Heute jährt sich zum 140. Mal der Geburtstag Albert Schweitzers – und das in einem sehr bemerkenswerten Jahr. So steht am 4. September bereits der 50. Todestag des noch heute weltbekannten Philosophen, Theologen, Arztes und Musikers an. Hinzu kommt ein ganz besonderes Jubiläum: Im September des Jahres 1915 – d. h. vor nunmehr 100 Jahren – gelang es Albert Schweitzer den für seine Philosophie zentralen, noch heute weithin bekannten Begriff zu finden: die »Ehrfurcht vor dem Leben«.

Denkwürdige Daten genug also, um zum diesjährigen Geburtstag Schweitzers die Entstehung und grundlegenden Aspekte seiner Philosophie noch einmal näher in den Blick zu nehmen und nach ihrer Aktualität – insbesondere für den Tierschutz – zu fragen.

Petitionen für die Tiere

Tragen Sie sich ein und erhalten Sie 1x im Monat Infos zu Petitionen:

E-Mail-Adresse

Jetzt fördern!

18

5 今回の課題（600～800字）

1. リーディング・アサインメント「生への畏敬」を読んでください。
2. 上記の内容と今回の講義の中で、あなたの印象に残った（重要であると思った）点（複数可）を、その理由と共に述べてください。

19

30 としてしめす。従来の倫理は、人間対動物の問題に対しては、無理解であるか、または答えるところを知らなかった。従来の倫理の主眼とするところは、人間対人間の関係のみにあった。たとえ動物への同情を正しいとは感じていても、これを倫理の中に包摂することができなかった。

動物虐待がその骨子となっているようないっさいの民衆の娯楽を、一般に認めなくなるような時代は、いつになったら到来するであろうか！

35 かくて、思惟に根ざした倫理は、けっしていわゆる「常識的に妥当」というべき類のものでは

2

「従来の倫理は、人間対動物の問題に対しては、無理解であるか、または答えるところを知らなかった。従来の倫理の主眼とするところは、人間対人間の関係のみにあった。」（p. 2, l. 30）

20